The Lepidopterological Society of Japan

Vol. XI, Pt. 4, 1960

蝶と蛾 Tyō to Ga

(Transactions of the Lepidopterological Society of Japan)

オナガミズアオの幼虫について

山　本　義　丸 1)

The Larvae of *Actias selene gnoma* BUTLER

By YOSHIMARU YAMAMOTO

現今では *Actias artemis aliena* BUTLER オオミズアオと *A. selene gnoma* BUTLER オナガミズアオとは雄交尾器の形態などによって明確に識別されるに至っているが，近年までほとんど混同された状況にあったため，その幼生期についてももちろん同様であった．従来も両者の幼虫を図説した書はあったが両種を識別するに足る記載ではなくて，オナガミズアオの幼虫を同定することはできず，中には混同していたと考えられる場合もある．著者もまたしばしばオオミズアオの幼虫を飼育したことはあったが，確かなオナガミズアオの幼虫は未知であった．今回採卵飼育によってオナガミズアオを飼育しその幼虫を調査することができたので，ここに記載して両種幼虫の識別について報告する．なお，オオミズアオの幼虫標本を提供された服部伊楚子氏に対して深謝の意を表する．

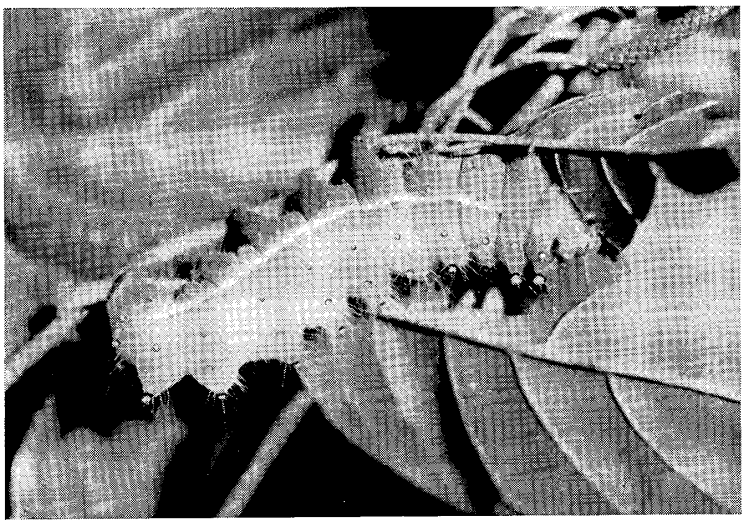

Fig. 1. Full-grown larva of *A. selene gnoma* BUTLER

Actias selene gnoma BUTLER　オナガミズアオ

形　態

〔**終令幼虫**〕 体長約75mm. 頭幅約5.5mm. 胴部各環節は背面中央で隆起し節間部で細くなっているので鋸歯状

1) 大阪府池田市城南町375

NII-Electronic Library Service

The Lepidopterological Society of Japan

を呈する．中胸節から第7腹節まで亜背線部に瘤起を配列し，中胸・後胸のものは特に大きい．第8腹節には中央部に同様の甚だ大きな瘤起を生ずる．これらの瘤起は先端が頭状をなし，1本の長い刺毛と数本の太い棘を生じ，基部周辺に数本の刺毛を生ずる．棘の数は中胸・後胸では8～9本，第1～7腹節ではほぼ4本，第8腹節では5～6本あり，第8腹節の瘤起には2本の長刺毛を生ずる．各環節気門上線部および気門下線部にも円錐形の小瘤起を配列し，前者にはそれぞれ棘1～2(3)本，後者には棘3～4本と2刺毛を生ずる．体表には大小の細かい顆粒を密布し，刺毛を疎生する．頭部は胴部に比して著しく小さい．頭蓋表面には鈍い顆粒を疎密に布く．前頭は高さと幅とほぼ等しい．副前頭縫線は前頭縫線と大体平行に走って著しい出入りをなさず，頂部に作る角は鋭角である．頭部緑褐色で下方は淡褐色となる．胴部は黄を帯びた淡緑色，気門線から腹面にかけては深緑色である．背楯黄緑色，中胸・後胸および第8腹節の背面瘤起は頭状部黄色でその下部を太い黒帯がとりまく．その他の瘤起は淡紅色で基部を黒環がとりまく．瘤起に生ずる棘は赤褐色，長刺毛は黒色で先端部黄白色，周辺の刺毛も黒色である．一般の刺毛は気門線より背方では黄白色，腹方では黒色である．第1～8腹節の気門線は甚だ鮮明で上縁褐赤色，下縁黄白色をなし，背縁付近の地色はやや濃色にぼかされる．気門は橙褐色で中央線褐白色．肛上板中央部から尾脚後縁にかけて紫褐色斑があり，その前縁を黄色に縁どられる．胸脚褐色．

〔**1令幼虫**〕 頭胴黒色．中胸・後胸および第5・第6・第9腹節の背面瘤起と前胸～第9腹節の気門下瘤起は橙色．

〔**2令幼虫**〕 頭部黒色，胴部暗橙褐色．背楯・中胸と後胸の背面瘤起および第5腹節以後は橙色．背線・側線・気門線に各節2個ずつの黒点を配列する．

〔**3令幼虫**〕 終令幼虫とほぼ同様の色彩になる．

終令幼虫におけるオナガミズアオとオオミズアオの相違点は胴部の構造にはほとんど認められないが，次の点

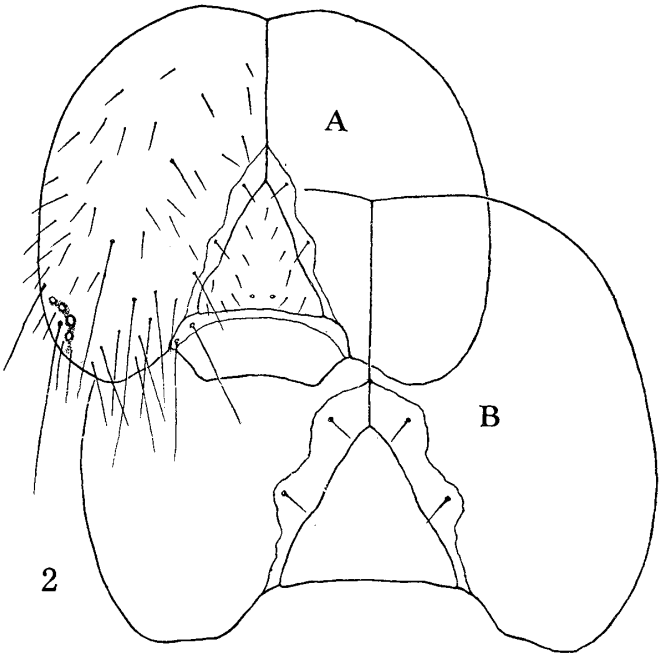

Fig. 2. Head, frontal view.
(A) *A. selene gnoma* BUTLER, (B) *A. artemis aliena* BUTLER

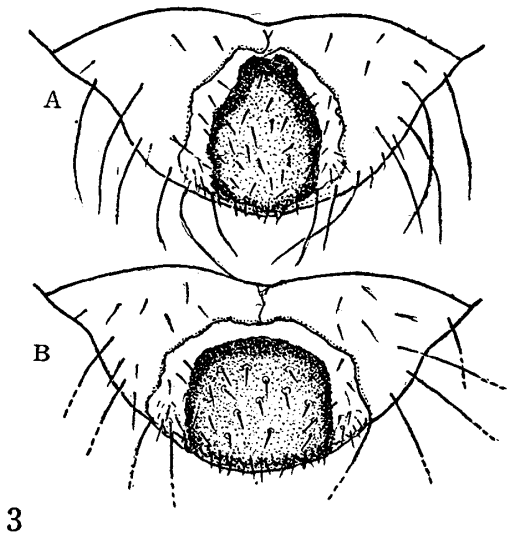

Fig. 3. suranal plate

NII-Electronic Library Service

The Lepidopterological Society of Japan

で識別することができる.

(1) 頭部が著しく小さいこと（オオミズアオでは頭幅約7mmでかなり大きい).

(2) 前頭および副前頭が縦に長いこと（オオミズアオでは前頭は幅よりもやや低く，副前頭縫線は著しく屈曲し，頂部に作る角が鈍角をなす).

(3) 個体変異の点が不詳であるが今回の材料においては，瘤起に黒帯・黒環が著しいこと.

(4) 同じく今回の材料においては，肛上板の斑紋が図の如く異なること.

習性・発生経過

野外での食草はまだ観察されていない．飼育にあたってはハンノキを使用したが完全に発育した．印度ではドクウツギ・ヒメシャクナゲ・フヨウの各属・ヤナギ・サクラ・クルミなど各種の植物につくというので，日本でもかなりの多食性ではないかと想像される．オオミズアオの食草として従来カエデ・サクラ・ウメ・アンズ・ナシ・リンゴ・ハンノキ・カバノキ・ザクロ・アセビ・クリ・コナラなどが記録されているが，この中にはオナガミズアオの幼虫で観察されたものも含まれているかもしれない．著者がオオミズアオを採集したのはカエデである.

発生回数は北海道では1回（6～7月)，関東—近畿では2回（4～5月・8月）であるが，南方地域では3回あるいはそれ以上であろう．飼育記録は産卵28—VIII，蛹化3—IX，2♀9—，3♀13—，4♀18—，5♀23—，営繭30—IX，羽化1♂27—X，1♀5—XI（池田市，1960)．ここに採卵した蛾は第2化のものであろう．したがって通常の経過では蛹でそのまま越年するものと思っていたが，居室内に置いていたところ上記のように第3化が出現した．雄交尾器は確実にオナガミズアオの特徴を示している．繭および蛹の形態はオオミズアオと全く同様である.

〔付記〕 日本幼虫図鑑に河田（1959）によって発表されているオオミズアオ幼虫は，瘤起の記載の一部にミスがあるが，確実なオオミズアオである.

台湾産未記録種及び異常型数種の蝶類

村　山　修　一[1)]

An unrecorded and some aberrant butterflies from Formosa

By Shu-iti Murayama

以下私は主として陳維寿氏提供の標本に基づき，台湾産の1未記録種と14の新異常型及び既知の2異常型を記載し，併せて日本産の1新異常型を発表する．ここに，陳維寿氏始め日本産標本を提供された吉阪道雄氏，比較材料として標本または文献を貸与された下野谷豊一氏，小林桂助氏，吉田真日出氏に対し謹んで御礼申上げる．以下特記しない標本はすべて著者の所蔵品である.

Papilio paris hermosanus Rebel ab. *divinitus* **nov.** (fig. 1 & 11) ルリモンアゲハ異常型

Type 1♂ Poli? 採集年月不明 Length of forewing 50mm. 表面後翅第1，2，3各室の青緑紋は正常型より背高く且黄色味を加える．第5室の青緑紋は内方にのびて中室端にも同色の班紋をあらわす，第5，6各室の青緑紋は正常型程外縁に延びない，第7室にも明瞭で稍々大きい青緑紋をあらわす，裏面後翅紫赤色の弦月紋

1) 大阪府茨木市新庄町744

NII-Electronic Library Service